

## 父と子の北朝鮮脱出記

神奈川県 若松亮任

### 一 北朝鮮に渡る

私は、昭和七（一九三二）年鹿児島県伊佐郡山野村（大口市）で生まれ、三歳のときに両親と一緒に朝鮮に渡った。

父は、大正十三（一九二四）年に鹿児島第二師範学校を卒業、県内の曾木・重富・山野小学校で教鞭をとった後、昭和九年希望して朝鮮の学校に赴任した。最初の任地は、咸鏡南道の日本海に面した港町、北青郡新浦にある新浦普通学校（小学校）である。私たちはここでオンドルのある朝鮮の民家を借りて生活した。次に、新浦から数駅離れている同じ郡内の、俗厚普通学校に校長として転勤、校内の一角にある校長官舎に住むことになった。官舎は、日本家屋で畳の部屋であった。この町には日本人は少なく、警察署や郵便局・農業

試験所等、公共機関で働く幹部の家族や、駅前で商売を営む数店の方々ぐらいであった。

私は、ここで学齢に達したので小学校に入学することになった。近くに日本人小学校がなかったので、ほかの児童と同じように新浦にある日本人小学校に汽車で通学した。ところが、一学期は病気欠席が多く、二学期からは永安に住む叔父の家に預けられることになった。叔父は、日本窒素に勤務。社宅住まいで叔母との二人暮らしであった。この日本人小学校は社宅からも近く、親元を遠く離れての生活であったが、友達も多くさほど淋しさを感じることもなく、楽しく過ごせた。

昭和十五年に、父は三水郡三水面にある三水普通学校に転勤になり、私も再び親元で妹たちとも一緒に過ごせることになった。三水は鉄道の終点恵山で降り、鴨緑江沿いの険しい山道をバスで行った盆地であった。この地方はまだ電線が敷設されてなく、ランプの生活であった。

父の勤める学校は高台にあり、町全体が見渡せ

る所にあつた。日本人小学校は高台を下った町の外れの方にあり、全校生徒が三十人ぐらいの小規模校で、複式学級であつた。上級生も下級生もなく、大きな一族のように和氣藹々とした雰囲気であつた。この地方は、朝鮮の北限に近く、寒さが非常に厳しい所であつた。丘陵には、当時初めて目にする綿や、アヘンの原料になるケシの花が広く栽培されていた。四年生になつた昭和十六年、一時里帰りのため夏休みに母と妹たち四人で鹿児島県伊佐郡羽月村の父の実家に帰つた。ここには祖母と曾祖父が生活していた。記憶がはつきりしてから内地の生活であつた。

## 二 大東亜戦争始まる

二学期は、羽月小学校に通うことになつた。この年の十二月八日、日本は大東亜戦争に突入、全校生徒は校庭に集合して、校長から開戦のニュースを聞いた。子供ながらに異常な興奮を覚えた。翌年の三学期は再び関釜連絡船に乗り、鉄道経由で三水に戻つた。

昭和十七年四月、父は咸興郊外の咸州郡長興にある州北公立国民学校に転勤になつたので、家族と一緒に引越した。私と妹二人は、咸興府にある咸興国民学校に転校した。私は五年、良子は三年、美保子は一年であつた。学校には気動車で通学した。

咸興府は咸鏡南道の政治の中枢で、公共機関をはじめ経済・文化施設が整備されていた。山手町にあつた咸興国民学校も、煉瓦造りの二階建ての立派な校舎であつた。

昭和十七年、シンガポールが陥落した後、記念にと、しばらく見ることもなかつた白いゴムボールが全員に一個ずつ配られ、大喜びをした。

## 三 中学生になる

昭和十九年、私は入学試験を受け、咸興中学校に九回生として入学した。この中学校は、当時急速に発展しつつあつた咸興・興南地区の内地人男子の中等教育機関として、昭和十一年に設立されたものであつた。所在地は、咸興と工場地帯の興

南の中間に位置する本宮である。私は、長興の親元からの通学が遠距離で困難なため、永安工場から本宮の窒素工場に転勤して来ていた叔父の家に、また世話になることになった。咸興・興南方面からの生徒の大部分は汽車通学であったが、私は社宅から徒歩で通学した。

咸興中学は、新設校らしく理想に燃え、進取の気性に富み、清新の気風が横溢していた。新しい校風も確立されつつあった。私たちが入学する前年には、学生・生徒の徴兵猶予が全面停止となり、十二月から生徒の出陣も始まった。二十年からは中学校も授業が一年繰り上げられ、四年生で卒業となった。

入学した当時こそ普通に授業が行われていたが、次第に授業時間が減り、軍事訓練や防空壕造り、タコツボ掘り、松根掘り、朝鮮の農家の農作業の手伝い、工場の無煙炭おろし等、教室外の活動が多くなってきた。物資不足でろくな食べ物が無い時代であったが、ひたすら「米英撃滅、欲しが

りません。勝つまでは」の精神で、勤労奉仕にも一生懸命汗を流した。

私は、時間がとれたときまれに親元に帰ることがあったが、二十年の七月に帰ったところ、父の勤める州北国民学校には、済南方面から陸軍の輜重隊本部と二百人余りの兵が移駐、教室を取られた。朝鮮の子供たちの授業は二部制になっていた。また、咸興中学にも一時北支から陸軍の部隊が駐留していた。軍全体の動向は分からないものの、朝鮮の北辺の守りを強化しようという一連の動きではないかと、漠然と思ったりした。

#### 四 終戦となる

本土が連日激しい空爆にさらされている中、八月六日には広島に強烈な新型爆弾（後の原子爆弾）が投下され、続いて九日には長崎にも投下された。被害は想像を絶するものであった。同日九日には、ソ連軍が中立条約を破っていきなり対日宣戦を布告、満州方面へ怒涛の進撃を開始していった。

そして、遂に八月十五日、終戦の詔勅が下された。当日、私たち低学年生は在校していたが、勤労動員で工場に出向いていた上級生は、昼過ぎに隊列を組んで帰って来た。何事が起こったのかといぶかりながら校庭に集合すると、校長から日本が無条件降伏で戦いに敗れたことを知らされた。皆、茫然自失の状態であった。学校からは、別命あるまで自宅で待機せよ、と指示された。この日、咸興も暑い夏の日ざしであった。

その日、帰宅してから叔父、叔母とどうい話をしていたか記憶にない。多分、今後のことについて叔父、叔母が不安げに語る話を聞いていたのだろう。数日、叔父の社宅で学校からの別命を待っていたが、それらしい動きもないし、長興にいる家族のことも心配だったので、長興まで歩いて帰った。当時は、一般家庭には電話も無く、相互に連絡する手段も無かったので、両親も叔父の社宅にいる自分のことを心配していてくれた。

父は、終戦の詔勅を職員室で先生方とラジオの

前で低頭して聴いたらしい。全く想像もしていないことだったので、あまりのことに愕然としたが、諸般の状況から授業の継続は困難と判断し、終戦の翌日から臨時休校することを決めていた。

学校には、終戦前に移動してきた輜重隊の後に、百人ぐらいの歩兵が移駐して来ていた。

ソ連軍は、八月下旬には咸興に進駐して来ていた。日本軍の各部隊には、整然と武装解除に応じるよう指令が出されていたのであろう。ある日、校庭に出てみると、武器弾薬を一箇所に集め、点検作業をしている最中であった。間もなくこの部隊は、長興より北の方にある五老里という町に集結させられた。それから数日後、今度は五老里から咸興方面に、四列縦隊の大部隊が左右を武装したソ連兵に囲まれ、将校は帯剣していたが、兵隊は丸腰で歩いて行くのが見掛けられた。

妹たちも、物陰から隊列を見ていたらしく、知っている兵隊さんがいたと教えてくれた。一般日本人に先立ち、日本に復員するのかと不思議に思

ったが、後で考えれば、これが苛酷な労働を強いられることになったシベリア送りであった。今でもかわいそうなことだったと思う。

このような動きの中で、父が非常に気にとめていた教育勅語を、どう処分していいかということがあった。ある日、暗くなつてから父と校舎に入り、金庫の中に納められている黒塗りの膳本箱を持ち出し、住宅の鈴懸の木の下の、玉砕する軍隊が軍旗を焼く例に倣つて、うやうやしく敬礼をしてから火をつけた。めらめらと燃え小さくなつていく炎を見ながら、言いようのない惨めさを味わった。

進駐して来たソ連軍の第一線部隊は、質が悪く横暴が目立った。当初は、内鮮人の区別なく通行人から腕時計や金銭、万年筆のたぐいまで巻き上げてしまい、夜に限らず住宅に押し入り婦女子を手当たり次第に犯すなど、悪行が毎日随所で繰り返されてきた。そのため若い女性は断髪し、顔を汚し男装して難を避けていた。

我が家も、二回ソ連兵に踏み込まれた。最初は、父が頭痛で座敷で寝ているときであった。突如三人のソ連兵が、自動小銃を構えて入つて来た。母と妹たちは異変に気付き、勝手口から近所の朝鮮の民家に逃げ込んだ。私と父は逃げ遅れたので、仕方なく両手を挙げた。銃口は父に向けられていた。まさか、そのまま引き金を引くことはないと思つたが、万一のことを思うとスーッと血の気が引く思いがした。

彼らは、手当たり次第に室内を物色し、めぼしい調度品や衣料品類を選び、布団カバーに包み、道路脇に止めていた四頭立ての馬車に積み込んで引き揚げて行つた。

それからは、ソ連兵の侵入に備え、貴重なものは床下に隠し穴を設けて取られないようにした。二回目は、父が一人で応対したが、ソ連兵は天井に銃剣を突き立てたり畳を上げさせたり、散々荒らした挙げ句に欲しいものを持って出て行つた。

こういうことがあつてからは、特に夜間、近く

の道路を走るソ連軍のトラックの走行音や警笛には、反射的にいつまた襲われるかもしれないという恐怖心を抱くようになった。

##### 五 官舎を追い出される

九月の中旬ごろ、州北国民学校が新たに発足した人民委員会に接収されることになり、校長官舎も明け渡すことになった。家財道具の大部分は近くに住む朝鮮人に預け、必要最小限の生活用品だけを持ち、その人の家の物置で生活することになった。そこは、入口の簡易戸と明かりとりの小窓があるだけの、六畳間くらいの暗い土蔵の物置であった。夜は照明が無いので、油を入れた小皿に布のこよりを浸し、ロウソク代わりに明かりをとった。今までとは天と地の差がある生活の始まりであった。当時は貯金も封鎖され、国債も換金できず、現金はほとんど持っていなかった。持ち物を売るか、物々交換で食料品を得るかしか方法はなかった。引揚げの目途も全く立たない中で、どうやって親子八人がそれまで生活していくか、深

刻な問題であった。このときの家族は、数え年で父四十二歳、母三十七歳、自分は中学二年、良子小学六年、美保子四年、則子二年、勝子六歳、武任三歳であった。

日々の食事も極度に切り詰め、塩味の雑穀混じりの重湯をすすめるような食事が続いた。しばらくここで生活しているうちに、我々を巡ってトラブルが発生した。それは、我々が日本に引揚げるとき、物置を貸している人が預けてある家財道具類を、一人占めするのではないかということらしかった。近所の青年たちが二派に分かれて争い始めた。この部落に不穏な空気が漂い始めたころ、このことを心配した保安隊の隊長が、治安維持の上からも良くないので、保安隊の中に住宅が一軒あるからそこに移ってはどうか、と援助の手を差し伸べてくれた。渡りに船と、良い条件の保安隊の住宅に移住することになった。

保安隊には、隊長以下四、五人の隊員がいた、隊長は、朝鮮民族の独立運動に貢献のあった闘士

らしく、我々にはあまり好意的でないように見受けられたが、副隊長は何かと親切に対応してくれた。後で聞いたところによると、十数年前副隊長が東京で苦学しているころ、年老いた父と病身の母の面倒をみながら農業を続けていた弟に、勤労働員の命令がきて困っていたときに、父が事情を聞いて同情し、面事務所に動員の免除手続きをしたことに恩を感じているようだった。

時期がたつにしたがって、ソ連兵の横暴も徐々に治まってきた。だんだんソ連軍の秩序も保たれ、憲兵の監視が行き届き始めたせいだろう。

しかし、そのころになっても引揚げの情報はなくなく、いつまでこの生活を続けなければいいのか、不安な日々の連続であった。それまで親交のあった朝鮮の人々も、親日派と思われるのを懸念し、我々に近づくのを避けていたが、中には人目を避けて夜こっそりと少しばかりの米を届けてくれる人もいた。どんなときにも人の情けはあるものだな、と子供ながらに有り難く思った。

秋の収穫の時期、ソ連軍の中尉を頭にして四、五人の兵が二、三回、米の供出督励のため数日保安隊に宿営したことがあった。母はその都度、前に親交があった朝鮮の民家に無理を言っただけでなく、状況が違っているので、随分気まずい思いをしたらしい。

この間、北朝鮮もソ連の占領下に入って、咸興も主要都市として日本人に替わり、朝鮮共産党幹部が新しい体制のもとで行政を行うようになった。市内の主だった建物の屋上には、赤旗が林立していた。

一方、咸興市内においても、終戦直後から咸興在住の一万二千人の同胞を混迷の中から救い出すために、有志による日本人世話会が設立された。この世話会は、北部からの避難民を含め、最終的には全員を日本に引揚げさせることを目標にしていた。そのため、困難な状況の下、各種情報の収集に努める一方、ソ連軍当局及び朝鮮行政機関に

対し生活の支援策について折衝に当たった。

咸興の郊外に日本人との交流が少ない場所にしたため、我が家は日本人世話会の活動の情報には疎かった。

## 六 母の死

住居の方は、お陰で提供してもらっていたが、冬になると気温が零下十四、五度に下がることもあり、寒さ対策も大変であったが、それにも増して食べ物確保には、非常に苦しい思いをした。栄養不足で体力がだんだん衰えていく中で、十二月になってから妹たちが次々に発熱し、床に伏した。自分も発熱したが、そのうち母も床に就いてしまった。流行の風邪かと思っていたが、これが発疹チフスであった。子供たちは、一週間ぐらいで快復したが、母の病状は良くならず、満足に診察も受けられず薬や注射も無く、皆の必死の祈りにもかかわらず、新年を迎えた昭和二十一年一月二日、六人の子供を残して三十八歳でこの世を去った。

母の遺体は筵で包み、壁板で作った担架に乗せ、夜になってから人目を忍び、凍りついた雪道に運び出された。昼間、日本人の青年に掘ってもらっていた共同墓地に埋葬した。悲運な環境の中で、このような哀れな姿で母を見送ったことは、いつまでも心の傷として残っている。母の死で悲嘆にくれているとき、今度は父が一週間くらい後に高熱で床に伏した。平時であれば入院するところであるが、それもかなわず、ただ私たちが交代で頭を冷やすのみであった。十日くらいたったころ、父も限界を感じたのか、夜が明けきらない前、私と小学生の妹二人を枕元に呼び、万一のときに備え、埋葬の場所や引揚先の郷里の住所のこと、それに金策や日本人会に世話になって日本に帰ること等、遺言のつもりか話をして聞かせた。父はそれで安心したのか、後は運を天に任せ一昼夜寝込んでしまった。幸いなことに、これで父は一命をとりとめ、最悪の状態にならずに済んだ。危なく孤児になるところであった。



その後も、一日千秋の思いで引揚げのことはばかり考えていたが、帰還に關しての情報は全く得られず、その日その日を食いつないでいくのが精いっぱいであった。七人で一日米四、五合、持ち物の売り食いで辛うじて命をつないでいく有様であった。

二月の末か三月の始め、北朝鮮も少し氣温が緩み始めたころ、本宮の叔父が、近日叔母と二人で南へ脱出するというのを伝えに來た。陸路徒歩で南下し、国境を越えるのも容易なことでないと思案じられたが、かなり綿密に計画を立てているようだったので、無事の脱出を念じて見送った。

我が家では、口減らしのため、自分と六年と四年の妹三人が、朝鮮人の家に奉公に出ることになった。自分は牛飼、妹は子守であったが、いずれも長続きはしなかった。

#### 七 咸興市内に移る

そうこうしているうちに、父は同じ長興にいる農業試験所の知り合いの人を尋ねたところ、ちょ

うど引揚げのための最後の整理をしているところであった。いろいろ話を聞いてみると、咸興の日本人会がソ連軍や朝鮮側の機関に働きかけ、精力的に帰還活動を展開していることが分かった。郊外に住んでいて、ぼやぼやしていると、引揚げに取り残されるのではないかと心配になった父は、早速保安隊の副隊長に相談、咸興市内に転入する手続きをとってもらい、日本人会に登録した。日本人会からは入居の部屋を割り当てられ、そこに引越すことになった。そのころ日本人会では、隠密ながら鉄道による南下計画を立ち上げ、徐々に計画を実行し始めた。また、これと並行して漁船（閘船）を備船し、海上ルートによる輸送計画も実行し始めた。

五月になつてから、朝日町の日本人会の会長に關係者が集められ、閘船で南下する計画があるが参加するかどうか、の意向打診があった。父は「我々は、どう算段しても、金銭的に後一カ月持ちこたえられるかどうか分からないので、是非お

願いたい」と申し出た。しかし、手回り品を残して持ち物をすべて売却しても、納金に達しない。後はどうにもならないので、窮状を訴え引揚げ後の後日払いでもと嘆願したところ、子供が多いことだからと免除してもらった。

こうして引揚げ準備を整え、五月十三日、集合場所になっていた西咸興駅に集まった。各方面から、約八百人が集まって来て、引揚げ団体の班編成が行われた。いよいよ長年住み慣れた朝鮮に、そして咸興に別れを告げ、これから港に向かうのかと思えば、今までのことが走馬灯のように頭をよぎり、何とも表現しようのない気持ちになった。咸興から無蓋車で西湖津の港に向かった。昼前に砂浜に着いたが、船らしきものも見当たらない。夕日が沈むころになって、やっと四隻の漁船が姿を現した。簡易な棧橋から班ごとに乗り込んだ。漁船は幅五メートル、長さ二十メートルくらいの近海用の平船の帆船であった。エンジンは装備していなかった。一隻に二百人くらい乗り込んだ。

普段は、獲れた魚を入れておく船倉に入れられた。立てば、蓋用の厚板に頭が当たる。膝を抱えてやっと座れるくらいのスペースしかなかった。これで三十八度線突破するのかと思うと、何となく心もとなない。父は南朝鮮到着を一昼夜余り、そして釜山經由博多着を三日くらいと見積もっていたようだ。今にして思えば、随分楽観的な予想であった。

#### 八 南朝鮮を目指す船

夜になって、やっと櫓を漕ぐ音が聞こえてきた。緊張と、これからのことを考えているうちに皆眠り込んでしまった。翌日目が覚めて、今ごろは元山沖を走っているだろうと周辺を見渡したところ、なんと、船はまだ港をほとんど離れていなかった。風が吹かなければどうにもならない。風任せであった。

二日目の夜になって風が吹き出したが、たいした距離を進んでいなかった。

三日目の夜になって、かなり強い風が吹き出し

た。船は快調に走り出したが、そのうち強風に変わり、船が大きく上下に揺れだした。時化であった。天井から海水が船倉に流れ込んできた。船倉は、悲鳴と船酔いの嘔吐でパニック状態になった。恐怖心が募るが、どうしようもなかった。

明け方になって、ようやく風が収まり始めた。夜が明けるのを待って、甲板には上がった。興南を出るとき四隻だった僚船はどこに行ったものか、前後に陰も姿も無かった。船酔いの後、格別に水が欲しくなった。水筒の水は皆飲んでしまった。船は流れるように進んでいた。しかし、三八度線までにはまだ三分の一くらいの航程である。先はまだまだ遠い。日はますます強く照りつけ、喉は焼けついてきた。生唾を飲み込んでみたところで、渴きは止まない。ある婦人は昨日から乳が出なくなり、泣き続けていた乳飲み子が死にかけていた。船べりに腰をおろして海を眺めていると、余計に水が欲しくなった。水筒に紐をつけ海水を汲み上げ口にしたが、とても塩辛くて飲めるもの

ではなかった。しばらくすると、喉はいつそう激しく渴いた。

四日目の夜半過ぎ、甲板の方で騒ぐ声に目が覚めた。耳を澄ますと、だれかが船が着くぞと叫んでいる。皆が口々に喜びの声を上げる。慌ててリユックサックを引き寄せた。人々は、争って天井から出て行った。やっとの思いで甲板に出て、砂浜に飛び降りた。振り返ると、船はあつという間に岸を離れ沖へ走り去っていた。遠くの方で水があるぞとの歓声が上がると、だれもが水をたたえた田圃の方へと我先に走り出し、水を飲んだ。翌日、田圃を見たら肥料用の牛糞がたくさん浮いていた。

#### 九 三十八度線踏破行

上陸地点が特定できないまま、砂浜で一夜を明かした。目が覚めたら、朝日が照りつけていた。残り物のお握りと油味噌で朝食をとり、丘の上の方に向かって曲がりくねった細い道を一行になって進んだ。昨夜、やっとの思いで上陸できたと喜

んだが、ここはまだ北朝鮮だったのだ。南朝鮮まで運んでもらう契約で金を払ったのに、闇船に騙されたのか。こうなると、あとは歩いて越えるしかなかった。

右手は高い連山が迫り、左手の防波堤の下にわずかな幅の砂浜が続き、小波がさわさわと打ち寄せていた。歩き始めて二日目。夕闇が濃くなり、視界が薄れてきたころ、低い声で集合の号令がかかった。一同、道路上に整然と四列の縦隊を作った。ソ連軍の警備線を突破するために、これから夜を徹して歩くのである。三十八度線に向かって、執念の第一歩が踏み出された。全員緊張しきって、一言も発する者も無く、闇路の中を静粛な行進が続いた。雨はしよぼしよぼ降り続け、湿気が身体にしみ込んでくるようであった。道はだんだん登りになり、右に左に曲がった。道の樹木や藪がこもりと繁り、道に迫る所もあった。時折、遠くの方で銃声がこだました。

二時間も歩いたころから、勝子の足が鈍り始め

た。武任は父の背中で寝込んでいた。勝子が、ぐずぐず言いだした。昨日からの強行軍で、五歳の女の子には無理からぬことであった。それもとうとう泣き声に変わり、父がいくら叱っても、なだめずかしても泣き止まなかった。どうしようもなく、無理矢理引っ張られて行くだけであった。

四時間ほど歩き続けたところに、峠に差し掛かった。ようやく雨が止んできた。道路の右端から道の中央に向け、一メートルほどの間隔に五、六本の丸太を並べ、その先端は三十センチメートルほどに積み上げた小石の上に乗せてあった。それが道の三分の二くらいの所まで延び、左右相互に二十メートルくらい続いている。足が触れようものなら、がらがらと音を立てて崩れてしまう。全神経を使って、一本一本丁寧に渡らなければならなかった。子供は抱き上げなければ通れなかった。皆が一步一步念入りに通り抜け、長い時間かかって無事に通過した。二、三百メートルも行ったころ、前の方で国境は過ぎたぞ、と大きな声が響き

渡った。

一斉に歓声が上がると同時に、列を乱してどやどやと走り下りた。ここに一筋の線を越えた。三十八度線を越えたのだ！ この線を越えるためだけに、どれだけの努力を払ってきたことか。腰をおろして休むと、安ど感が全身を満たしていくのが感じられた。勝子がふらふら座ったまま眠りかけていた。夜中の二時か三時だろう。おぼろ月に兩上がり、靄が濃く立ちこめてきた。下り坂の道脇にポプラの木が高く伸び、民家の屋根が何軒もおぼろげに浮かび、穏やかな眺めであった。

#### 十 輸送船上の苦悩

畔を下った所は、注文津の町である。この町から引揚船が出ていて、既に大勢の人が船の出るのを待っていた。これではいつ船に乗ることができぬのか分からなかった。その間に汚れた衣類を洗い、父は菰や吠の破れたのをほどいて草履を作った。子供たちの履物は歩き続けたために既にぼろぼろであった。もはや口にするものは何も無かつ

た。所持金は百円札が一枚。もしこれを使ったら、船の中でどんなことが起こらないとも限らなかつた。仕方無く浜辺に出て休んだり、室内で仮眠したりしては時間を過ごした。

四日目になって、いよいよ乗船の順が回ってきた。小さい棧橋に並んで舟艇に移り、沖の黒船に向かつて走った。近付いて見ると、それは驚くほどの大きな船であった。舟艇は船腹に横付けされて、上下左右に揺れた。タラップが無く、甲板から繩梯子が降ろされていた。

夜はとつぷり暮れたが、船はしばらく動きそうになかった。幅の狭い奥行きの短い廊下に米俵を敷き、空腹のまま荷を枕に身体を横に伸ばすと、安心感と疲れのためいつしか寝入ってしまった。

翌日目が覚めたとき、船は釜山港に着いていた。いよいよひもじさに耐えられなくなってきた。三歳の武任が何か食べたいと泣き続けた。その声を聞いた父は、全身を針で刺されるような気がして、親であるのに何もしてやれない自分を情けなく思

ったとのことだった。思い余って、父は上級の船員に窮状を訴えに行くと、食糧庫の中から平たい大きな缶詰を二個持って来て渡してくれた。お陰で、ひとまずひもじさは取れたが、みんな動く元気は無く、横になったまま過ごした。配給はその夜と次の朝に、麦と米を混ぜたお粥のようなご飯が一人前湯呑み茶碗一杯くらいであった。仕方無く、父はまた炊事場に行つて、残飯をもらつて来て少量ずつ口にした。

乗船の日から三日間、注文津に着いてから七日間、食事らしいものを食べていなかった。夜が明けると博多に着くから、それまで辛抱するように言われた。

目が覚めると、ふらつく足を踏みしめ甲板に出た。見ると、懐かしい故国が間近に迫り、刻々と近付いていた。夢にまで見た山の姿がだんだんはつきり見えてくる。船尾にひるがえる日の丸に、鮮烈な感動を覚えた。妹たちも、長くつらかった旅をしてきたとは思えないほど生き生きした表情

になって一心に眺めていた。エンジンの音はますます快調、いつしか港の中に突き進んだ。

檢疫のため、上陸はできなかった。しかし、もはやひもじい思いをすることもなくなった。一人に乾パンが一袋、丸い食パンが二個という配給を受け、久しぶりに食べたいだけ食べることができた。

#### 十一 博多港に上陸

五月二十七日十時、船は静かに方向を転じ、博多港の岸壁に横付けされた。上陸が開始されると、各自リュックサックや携行品を持って、デッキから埠頭に降り立った。祖国への第一歩を力強く踏みしめた。

船の上からでもおよその見当はついたが、実際に目にした博多の姿は、まことに悲惨であった。市街地は空襲を受け、焼き尽くされ、後に建てられたらしいバラックの人家が見られた。話には聞いていたが、想像以上であることに驚嘆させられた。

四、五人の学生が、メガホンを通して引揚者にねぎらしい言葉をかけていた。純情な学生の優しい気持ちに打たれて、目頭が熱くなった。彼らは実に機敏に行動して、一人一人の荷物から子供まで、丁寧にトラックの上に乗せてくれた。毎日毎日、引き続き引揚げて来る人たちのために、こうした奉仕をしてくれるのだと思うと、じんと心に応えてくるものがあった。

街に出ると、朝鮮ほどではないが、いろいろな露店が並んでいた。上陸時に与えられたお金で、皆に一足ずつ下駄を買ってもらった。大喜びで古物と履き替えた。歩いているとサツマイモが目につき、また一皿ずつ買ってもらった。金さえあれば、何でも買えるのだ。

無料の外食券で玉子丼を食べ、郷里の鹿兒島に向かう汽車に乗った。私たちが帰国できたことを知ったなら、祖母がどんなに喜んでくれるだろう。沿線の風景は松林ばかりの北朝鮮と異なり、いろいろな種類の木々が若葉に覆われ、鮮やかな緑の

色が目にしみた。春も過ぎて、今や初夏の候となっていた。車窓を吹き抜ける風は暖かで、見え隠れする内海には白帆が夢のように浮かんでいた。

#### 十二 我が家にたどり着く

水俣駅で下車した。皆、みすばらしい姿をしていたので、待ち合わせ時間に散髪をして少しさっぱりした。水俣駅から山野線に乗り、大口駅で宮之城線に乗り換え、生地羽月駅に降り立った。歩いて十五分、とうとう我が家にたどり着いた。たまたま菜園で畑仕事をしていた祖母は、私たちを見て「天から降ったか」、「地から湧いたか」と驚くと共に、泣き声を上げながら走り寄って抱きついてきた。

その日は、近所の人も話を聞いて喜んで駆け付け、夕食の手伝いもしてくれた。そして何カ月ぶりに風呂に入り、白いご飯に心尽くしの鶏肉などのご馳走を腹いっぱい食べ、何の心配もすることなく床に就いた。ただ心残りには、母を一人北朝鮮の山中に残して来たことだけであった。

### 十三 帰国後の生活

私たちが帰国するまで、祖母は一人で暮らしていたが、帰国後はいきなり八人の大家族になり、新しい生活が始まった。戦後は、都市部に限らず農村でも食糧難であった。幸い我が家では、祖母が私たちの帰りを待って、米やサツマイモなど食べ物を確保しておいてくれたので、秋の収穫時期まで食いつないでいけた。我が家には田圃が四反、畑が二反くらいあったので、自分たちが食べていく程度の米や野菜は作ることができた。

妹たちは帰国して間もなく、地元の羽月小学校に一年遅れで転入した。私は、八月に同じように外地から引き揚げて来た者十数人と、旧制大口中学校の編入試験を受け、一年遅れで二年に転入した。

父もしばらく農作業に従事していたが、翌年の昭和二十二年四月、やっと復職できて、羽月中学校の教諭として勤務することになった。引揚者の中には、帰国後も住む家が無く仕事にもありつけ

ず、苦勞した人が多かった中で、我々はお陰で恵まれた方だった。

父は昭和二十四年再婚、翌年には弟和任が生まれ十人の大家族になり、我が家もやっと人並みに明るさを取り戻すことができた。

父は、大口市内の小・中学校の校長を勤め終え、昭和三十四年に退任した。子供たちもそれぞれに成長し、自立した生活を送れるようになった。

父は、昭和四十六年ごろ、韓国のラジオ放送局KBSに、北朝鮮での教え子捜しを依頼する投書を出して、放送してもらった。たまたまこの放送を聞いたソウル在住の崔さんが、父の教育者としての誠意に打たれ、協力の申し出があった。この協力が功を奏し、その後二十数人の教え子の所在が分かり、文通が始まった。

昭和五十二年、父は七十三歳のとき招かれて三女則子を同伴して韓国に渡り、南北の分断で厳しい環境をくぐり抜けてきた北朝鮮の教え子と、ソウルで感激の再会を果たした。このことは、地元



紙鹿兒島日報に「子弟愛は国境を越えて」という見出しで紹介された。また、このときの様子は韓国のテレビでも放送された。父は戦時下、国策にそって皇民化教育を行っていたはずであったが、そのわだかまりを乗り越えて人と人、教師と生徒という関係で暖かい交流が続けられたということは、私にとってもせめてもの慰めである。

父は、生存中なんともして亡き妻の墓参りをしたいと願っていたが、承知のような政治情勢で、それもかなわず平成七（一九九五）年に九十一歳で他界した。

#### 十四 終わりに

今年、平成十九年十二月八日は、開戦の日にあたるが、その日は父の十三回目の命日でもある。郷里大口市で法要を行うことにしている。幸いなことに私や妹、弟も大病をしたり死亡することもなく、年相応の健康を維持しながらそれぞれ平穏な生活を営んでいる。妻が「貴方たち兄弟は、亡くなったお母さんの健康な遺伝子をもらったの

ね」と、時折口にすることがあるが、そうかもしれないと思うこともある。母一人が北朝鮮の地で身代わりとなり、私たちを救ったのだろうか。私たちを慈しみ育ててくれた継母も九十七歳になり、郷里の特別養護老人施設にお世話になっている。

思えば、終戦直後の様々な出来事も遠くに過ぎ去った。中学に在学中、漢文の授業で杜甫の漢詩の中の「国破れて山河あり」を習った。訳意も聞いたはずである。そのときは、まさか自分たちがそのような運命になるなど、無想だにしなかった。国が敗れるということは、これほど惨めなことかと、敗戦国民の悲哀を身にしみて味わった。国威は目に見えないが、空気のように有り難いものであることを痛感した。外地にあったため、少年ながら「祖国日本」に対する思いには格別に熱いものがあつた。

戦争による惨禍は、軍民を問わず国民がそれぞれの立場で等しく体験した。幸い、日本は戦後この尊い犠牲を無にすることなく、平和国家、文化

国家の建設に邁進してきた。お陰で世界がうらやむような経済大国に成長した。一部には、行き過ぎた社会現象や問題も生じているが、大局的に見れば、平和あつてのものと言える。日本は、これからも戦争放棄を国是とし、世界平和のために、国際社会の中で先導的役割を果たしていくべきだと思つている。

## 清津・羅南から家族引揚げの記

静岡県 勝海 鋭朗

### 一 生い立ち

父は、大正時代に北朝鮮羅南の第十九師団騎兵第二十七連隊を特務曹長で現役除隊し、その後内地（日本）で土木請負業を始めたが、労働力である朝鮮人の暴動に巻き込まれ破産した。昭和五（一九三〇）年四月、兵隊仲間であつた羅南の知人を頼り、夜逃げ同様の姿で朝鮮に渡つた。当時の家族は、父母と兄二人姉一人の五人であつた。

羅南では、生駒町の貸家に居を構えた。古い陶器屋の裏あたり、道を挟んで前には履物屋があつた。当初は陸軍の射撃場の仕事を請負つていたそうで、「赤貧洗うがごとし」という表現そのままの貧乏な生活だったと、当時四歳半だった長兄が話していた。その後、二年という約束で騎兵連隊の馬の調教師となり、陸軍軍属として官舎に入っ